

平成28年度 第1回 学校評議員会 記録

日時 平成28年6月21日(火)
10:30 ~ 11:50
会場 気仙光陵支援学校 会議室

【出席者】

〈 学校評議員 〉 A委員 (教育関係) B委員 (卒業生関係) C委員 (進路先関係) D委員 (地域関係) E委員 (地域関係機関)	〈 学校職員 〉 校長 副校長 2名 事務長 総括教務主任 小学部主事 中学部主事 高等部主事 寮務主任
---	--

- 1 開会のことば
- 2 校長挨拶
- 3 出席者自己紹介・・・上記出席者のとおり
- 4 協議
 - (1) 学校経営計画について
別紙資料により校長が説明
 - (2) 各学部・寄宿舎運営計画について
スライドにより学部主事、寮務主任が説明
 - (3) 進路指導の状況について
資料により担当副校長が説明
 - (4) 支援事業の状況について
資料により担当副校長が説明
 - (5) その他
なし
 - (6) 協議
(A委員)
 - ・ 授業を見学させていただき思ったことは、子どもたちの外部の方への挨拶や接し方が自然である。先生方が一生懸命子どもたちを育てていることを感じる。学校教育の基本をいつもこの学校に来ると感じる。
 - ・ 授業を大事にする。昨年度のアンケートを基にした重点の見直しを行う。余暇の過ごし方をどの学部でも具体的に考えさせる取り組みを始めたなど、勉強させられることがたくさんあった。

(B 委員)

- ・ 子どもたちが自然に挨拶をするなど、外部の方を自然に受け入れていることがとても良い。
- ・ 部活動について、中高生は体力もあり、寄宿舎の時間の兼ね合いもあるが、もっと進めても良いのではないか。環境を作る努力を行っていることはとても良い。将来的には他校とのスポーツ交流を進めていければよい。

(C 委員)

- ・ 様々な新しい事業が毎年増加し、学校の職員は負担がかかり大変ではないか。
- ・ 授業を見学し、木工の授業で感じたことは安全面である。グラインダーを使い研磨作業を行っていたが、万が一のけがに備え安全カバーを取り付けるなど、安全対策を施してもらいたい。
- ・ おたずねしたいことがある。当社において外国人労働者 30 人を雇用し、寄宿舎に住まわせている。中国やベトナムの方々だが、言葉がうまく通じず、日本の習慣を理解してもらえずに生活面で大変である。
- ・ 寄宿舎の運営面で、特に安全と衛生面で配慮されていることを伺って参考にしたい。

(寮務主任)

- ・ 衛生面では初めは職員と一緒にしながら習慣づけ、段階を追って一人でできるように指導している。
- ・ 安全面においても通学指導の場合、発達段階に応じながら交通ルールの遵守や電車、バスの利用など、最終的に一人でできるよう指導を行っている。

(担当副校長)

- ・ 安全面では実態に応じて危険回避の方法を教え、ゴミの分別は絵やイラストなど視覚的な支援を行いながら指導をしている。

(E 委員)

- ・ 初めてのことが多いので、様々な知らない用語等についても勉強していきたいと思っている。
- ・ 他者との関係を築くことのできない子どもが、将来の自立を考えて支援学校を保護者が選択した事例をテレビで見た。
- ・ 小学校教員をしていたときにダウン症の子どもを受け入れたことがあった。初めてのことであり、専門性を持った教員もいなかったが、当時の養護学校の支援を受けながら受け入れたことがあった。
- ・ また就学指導の段階で、一貫した教育で将来の自立を目指すため養護学校が良いのではないかという子どもでも、保護者が地域の子どもと生活させることを望み、小学校へ入学したケースもあった。
- ・ こちらの児童生徒数を見ると、中学部、高等部の段階から生徒数が増えている傾向があるようだが、中学部から生徒が増えるのか、高等部から生徒が増えるのかお聞きしたい。
- ・ 進路の関係で支援 A 型、B 型とあるが違いについて伺いたい。

(総括教務主任)

- ・ 特別支援学校入学は小学部から入学する児童、中学部から入学する生徒、高等部から入学する生徒とそれぞれの態様により検討し、そのときにベストな選択を行っている。

(小学部主事)

- ・ 最近は小学校でも特別支援教育について校内で研修を深め、様々な実践を積み重ねている。
- ・ 小学校時代は地域の子どもたちと勉強をして社会性を育み、中学校進学時に将来を考え支援学校中学部を選択、または通学のことを考え選択することもある。

(高等部主事)

- ・ 高等部進学希望者の場合、入学選考を受ける前に教育相談を実施し、学校の教育内容を見て生徒に合っているとすれば本校を選択し、違うとすれば他校を選択する場合もある。本年は11名が本校中学部から、3名が中学校から入学してきた。

(総括教務主任)

- ・ 以前は教育委員会が就学先を決定していたが、最近は保護者と子どもが特別支援学校を見学し、検討した上で就学先を決定している。

(担当副校長)

- ・ 就労移行支援A型、B型の違いについては、一般就労を目指すがそこに至るまでもう少し訓練が必要だったり、本人に相応しい事業所が見つからなかった場合等の進路先として利用している。B型については通所して授産的な活動を行い工賃をもらいながら利用し、A型については雇用契約を結び給料をもらいながら利用する。

(E委員)

- ・ 普段は支援学校の実習生の方々を受け入れることが主となっており、学校の授業の様子を見る機会がなかなか無く、今日は貴重な経験をさせてもらった。
- ・ 作業学習の様子では一人一人に目をかけた支援をしていると感じた。電動車いすの方にも合った作業を行うなど、包括的な支援をしている。一人一人の児童生徒に目を向けると違う支援やサポートがあることを感じた。
- ・ 先生方の話の中から「自己有用感」という言葉が聞かれたが、一貫性を持って繋がりを意識した教育を行っていることを感じた。
- ・ 特別支援教育のセンター校としての位置づけの中で、気仙管内の特別支援教育を支えるという自負が伝わってきている。社会福祉施設も社会資源として地域と繋がりを持ち地域と活動していくことが大事だが、教育の場でも地域との繋がりの中から育んでいくことが伝わってきた。社会福祉施設としても見習わなければならない。

(A委員)

- ・ 課外活動の充実により、職員の負担が重くなるのが心配だが、どのようにしているか。
- ・ 寄宿舎は現在定員はいっぱいか、余裕はあるのか。在学中に途中で退舎し、家庭に戻ることはあるのか。

(高等部主事)

- ・ ご指摘頂いたとおり、課外活動を生徒にやらせたいができるかどうかを職員間でも議論した。
- ・ その結果、雨天でも保証できる屋内での活動とし、運動としての「バスケットボール」、肢体不自由の生徒でも楽しめる「茶道」、実態が重い生徒でも楽しめる「ダンス」と3つの内容に絞った。

- ・ 各内容とも年間10回、計30回を水曜日を中心として計画し、生徒の所属は固定化せず、どの活動に参加しても良いこととした。職員は3つの活動内容のうちの1つの所属とし月1回の活動となる。生徒は月3回の活動となる。
- ・ 活動時間は勤務時間内となる。

(寮務主任)

- ・ 今年度の在舎生は43名。50名定員だが部屋割りの工夫で60名まで入れる。しかし寄宿舎職員の配置は次年度の在舎生見込み数で配置されるので、後17名がすぐ入舎出来るかとなるとすぐには難しい。
- ・ 入舎の条件としては自宅まで遠距離であるとか、医療的ケアを必要としないなどで、1年ごとに利用希望を更新している。
- ・ 寄宿舎の生活より家庭の生活が望ましいという理由で退舎したケースは近年はないが、家庭状況により入舎した例はある。

(校長)

- ・ 適正進路について補足だが、障がいの重い子は特別支援学校小学部、軽い子は小学校という流れが原則だが、現在は教育委員会の適切な就学指導の結果が特別支援学校でも、保護者の意向により小学校ということもある。
- ・ 小学校は特別支援学級でも中学校では高校進学をしたいので特別支援学級は外してほしいという保護者もいる。そのようなケースの中でも高校進学後ドロップアウトして特別支援学校高等部に入学し直すケースもある。
- ・ 小学校は特別支援学級で中学校、高等学校は特別支援学校中学部・高等部と進むケースや小中学校は特別支援学級、高校は特別支援学校高等部というように様々なケースがある。
- ・ 高等部進学者の内訳では以前は支援学校中学部からの進学者と中学校からの進学者の割合は5：5位であったが、今年度は中学校からの進学者は3名で他は特別支援学校からの進学者というように様々なケースがある。
- ・ 「一貫性」という場合、小学部から高等部まで特別支援学校で教育を受けることが一貫性とういことではなく、どの段階で入ってきた子どもであっても適切に実態把握をして、3年後、6年後を見据え、「指導内容」と「指導方法」に系統性、継続性をもって指導を行っていくことを「一貫性」と捉えて頂きたい。本日は本当にありがとうございました。

5 閉会